



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.236
2023.5.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— 『日本先史土器図譜』と現在 —

鈴木 正博

● 第51回 ● 新しい比較研究の嚆矢

山内清男没後10年となる1980年前後からは『日本先史土器図譜』の役割が抜本的に見直され、山積された加曾利B式資料の「新しい比較研究」に個別標本として活用される。今回から『日本先史土器図譜』以来、没後の「新しい比較研究」を拓くとの認識の下で進められた議論を中心に据えるが、**共同備忘録**とすべき原点は第53図の**地域間交差編年表**にある。「共通誤認識」批判やその後の改訂は**文献(1986)**から本格化する。

【例言】

- 適宜座右の『日本先史土器図譜』(以後『図譜』と略)参照を希望する。それは紙面の制約上、『図譜』全ての個別標本の複写引用は極力控え、図版番号のみの指示への対応である。
- 『図譜』の加曾利B式3「細別」(「古い部分」「中位の古さ」「新しい部分」)は、再版・合冊版(1967)の目次では「加曾利B式(古)(中)」と多少改変されているが、最終版編年表では「加曾利B1・2・3式」(山内清男(1969)「縄紋草創期の諸問題」『ミュージアム』224)と命名される。初版・ガリ版袋入と再版・合冊版との相違・改変が山内清男の意図であるか否かは現在未明で、慣用に従い再版・合冊版の取り扱いを初版扱いとする場合は、初版との違いを承知とする。そこで『図譜』の3「細別」名称はこれまで通り最終版編年表の「加曾利B1・2・3式」を継承する。
- 年代的な変遷である**縦の構造**は、本連載第49回で示した『図譜』の「**範型**」概念を用い、**地点別層位と器種別文様帯からSD法に準じた「範型」シーケンス**を構築し、**年代別「相似」型式学**に至る。「相似」

とは**類似関係**であり、「**コロボックル考古学**」を遺産として継承する。

- 特定の系列や地方的細別による**横の構造**は、晩年に吐露された「**類型**」概念(山内清男(1969)「縄紋時代研究の現段階」『日本と世界の歴史』第1巻、学習研究社)

を用い、地点別層位に**文様帯別「類型」**組成を導出し、「**類型**」毎の連鎖関係から**地方別「相同」連鎖社会論**を構築する。「**相同**」とは**相違関係**であり、同一層位の異系統・異系列関係は**大正12年「諏訪郡壮丁の人類学的研究」**を遺産として継承する。

▼第53図：大森貝塚を中心とした加曾利B式・曾谷式・安行1式編年の大要(文献(1980b)から抜粋)

日本先史土器図譜	層位・地点	型式	細別	系列あるいは地方的細別		
				西部関東	東部関東	
加曾利B式	古い部分	中妻貝塚下層(黒色土層)	加曾利B1	a, b, c, d(古, 新), e	(*)	
	中位の古さ	中妻貝塚上層(貝層)	加曾利B1-2	a, b, c	小仙塚 { 1 福田, 2 僧御堂, 3 大森1 }	中妻 { 1 福田, 2 僧御堂, 3 下総(X) }
		遠部包含地	加曾利B2	(#)	大森2	遠部 緩衝(X), 下総・常陸(X)
新しい部分	広畑貝塚	加曾利B3	広畑 { 下層 遠部, 中層 新 }	大森3	遠部(#), 広畑(#)	
曾谷式	広畑貝塚貝の花貝塚5号住	曾谷	1, 2, 3, 4	高井東 { 1, 2, 3, 4の一部 }	曾谷 { 1, 2, 3, 4 }	
	真福寺・曾谷					
安行1式	曾谷貝塚D地点千代田遺跡	安行1	a, b, c	高井東 { 4の一部, 5 }	安行1 { a(曾谷D下層), b(曾谷D上層), c(千代田) }	
	岩井貝塚, etc	安行1-2	a, b, c	(*)		

註記 1. この表は仮製のものであって、後日訂正増補する筈です。
 2. (*)印は組別としての系列化に及ばなかったもの。
 3. (X)印は遺跡名ではなく、分布概要あるいは他地方の特定の型式と関係する状態を示したものの。
 4. (#)印は統合としての結果を示したものの。
 5. (+)は適当な遺跡が検索されないが、関係する多数の遺跡がある場合。

*巻頭連載は隔月です。次回は大村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 新しい比較研究の嚆矢(第51回)	鈴木正博 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイパレット・サイト(第229回) 堀川洗太郎 …3
■考古学の履歴書 私の考古遍歴(第3回)	工業善通 …2	■考古学者の書棚 『縄文里山づくり ー御所野遺跡の縄文体験ー』 松浦 誠 …4

考古学の履歴書

私の考古遍歴 (第3回)

工楽 善通

私が奈文研に入った翌年より、平城宮跡発掘調査部から職員2名が、文部省文化財保護委員会(1968年から文化庁となる)の記念物課へ出向するということになり、その初年度の1965年には坪井清足さんと、入所1年目の町田章さんが4月1日から東京へ行くことになった。これは埋蔵文化財に関する諸事務を統括する記念物課の職員不足を補うための方策で、奈文研の人員定数を吸い上げる不当な出向であったが、上級官庁からの指示で、従わざるを得なかったのである。この出向制度は1972年まで続いた。

1965年の秋頃から、兵庫県尼崎市で近隣の伊丹市・豊中市と三市共同の下水処理場建設が始まり、そこで広範囲に及ぶ弥生時代の田能遺跡が発見された。その事前の発掘調査が尼崎市と地元の村川行弘さん、高校教師であった石野博信さんらの協力によって進められていた。ところが出土する遺構が弥生時代の各期に及び、関西で初めての方形周溝墓や木棺墓、そこから保存良好な銅釧が見つかるなど、極めて密度が高いにもかかわらず調査員が少なく、発掘費用も不足をきたし調査は難行していた。

1966年2月初に、私は上司である田中琢さんから「2月11日は建国記念日や、こんな日に休んどったらあかん、一緒に田能遺跡に行こう」と言われた(ちょうどこの年から11日が国民の祭日となった)。当日2人で田能へ出かけた。現場は足の踏み場もないほど穴だらけで、穴には土器のつまった所が各所にあった。村川・石野さんから遺構の説明を受けた後、夕刻になって琢さんから「お前はもう2~3日残って様子を見て帰れ」と告げられた。私は全く予期していなかったが、3日残ることにし、初対面であった石野さんと同宿させてもらった。

その後も田能遺跡からの発掘成果や調査の窮状を訴える新聞報道がなされ、地元では「田能遺跡を守る会」が結成されたりして市民の注目度が増していった。現場では建設工事の都合上、発掘地を拡張せざるを得なくなり、市教委は苦慮していた。このような状況は文化庁に出向中の坪井さんの所へも琢さんから連絡がいていたのだろう。文化庁は4月に入って市の発掘調査に補助金を出すことになった。市は調査員確保に手を尽くしたが成らず、奈文研の考古職員に動員を要請してきた。しかし、平城宮跡発掘調査部は宮跡の発掘だけで年間12,000㎡を調査するノルマを課せられていることから、とても外部の調査へ人員を割くことはできないと、職員組合でも大きな問題となった。結局のところ文化財支援のため、田能遺跡へ行かざるを得なくなった。5月に入って考古の発掘調査部員のほぼ全員が、宮跡の発掘に支障をきたさない範囲で交替して、主に拡張区の調査に9月まであった。その間、京大考古学研究会の有志や、地元武庫川女子大学考古研究部の学生諸君、東北大学から林謙作さん、国学院大学の柳田康雄さんなども数日泊まり込んで、我々

と一緒に手伝ってもらい、夜は考古学全般にわたって色々と議論もした。佐原さんが泊り込んでの雨天の日には、出土品の整理のほか、女子大生への考古学講座も開かれ大人気で、それを目当ての雨日参加の人もいたほどだった。現場の写真撮影には横浜の三殿台遺跡に居た森昭さんがずっと一緒に滞在した。こうして長く続いた田能の現場は、結果として私が最後まで居残ることになり、1967年4月初に宿舍であった地区会館の、皆が残っていた泥だらけの長靴や防寒具などの残留物の跡片付けをして、庭の満開の桜に見送られて奈良へ戻った。

1967年夏には福岡県教委から、大宰府南方の小郡市で宅地造成中に弥生土壌群や複数棟が重なった掘立柱の建物跡が見つかり、九州ではこれまでにこのような柱跡の発掘経験がないので、奈文研からの応援がぜひ欲しいという要請があった。現場は県教委松岡史・宮小路賀宏・柳田康雄さんによって、地元の高校生の応援を得て進行中であった。8月に入って横山浩一さんと私で現地を下見に行き、渡辺正気さんに案内してもらいながら打ち合わせをした後、9月に入って私が発掘に参加することになった。調査を進めると建物は7~8世紀に、3時期にわたり変遷していることが判明した。

この遺構群はきわめて規格性に富んだ官衙的性格を持ち、筑後地方にとって重要な遺跡である旨を県教委へ話し、次年度にもさらに範囲を拡張して建物の拡がりや、年代を確定する資料を得る発掘をする必要性を伝えた。その結果、'68年の発掘調査は5月と8~9月に実施することになり、奈文研から数名が交替して参加した。

この2年にわたる発掘調査の結果、小郡遺跡は、筑後国御原郡の郡衙跡の一部と推定するに至ったが、'74年に「小郡官衙遺跡」として国の史跡指定を受け、現在小郡官衙遺跡公園として保存されている。調査時に全国で郡衙遺跡として知られていたのは、茨城県の常陸国新治郡衙跡のみであったことから、文学資料などの確実な裏付けがない限り、官衙遺跡という一般名称にしておくことが適切であるという史学者の見解であった。その後も摂津国嶋上郡衙跡のように墨書土器などに郡名が明記された出土品がない場合は、〇〇官衙遺跡としている。

略歴

1939年	兵庫県高砂市に生まれる
1958年	兵庫県立高砂高等学校卒業
〃	明治大学文学部史学地理学科入学
1964年	同 大学院修士課程修了
〃	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ入所
1969年	文化庁記念物課へ出向
1973年	奈文研平城宮跡発掘調査部第2調査室へ配属
1992年	奈文研飛鳥資料館 学芸室長
1995年	埋蔵文化財センター長
1999年	奈良国立文化財研究所定年退職
〃	(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所勤務
2001年~2021年3月	大阪府立狭山池博物館館長

隔月連載です。次回は山本曜久先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 229

前宮遺跡 ～長野県茅野市

堀川 洸太郎

あるときは滔々と、またあるときには激流となって、天竜川は伊那谷を遠く遠州灘へと流れてゆく。その東岸に連なる伊那山地の最北端に、上伊那と諏訪の境界をなす守屋山が鎮座する。その北麓、諏訪盆地の西南境を縁取るいくつもの小さな扇状地の一つに、取り残されたかのように鎮まる小さな社こそ、中古以来「日本第一大軍神」として天下に神威を轟かせる信濃国一之宮・諏訪社の「発祥の地」とも呼ばれる、上社前宮の社叢である。小町屋とよばれるこの小さな扇状地とその両端の境界をなす峰上には、この前宮をはじめ、かつて諏訪明神の現身としても尊崇された上社神職・大祝の戦国期までの居館であった、長野県史跡「諏訪大社上社前宮神殿跡」や、中世上社の年中神事の舞台となった様々な古祠、その他山城、横穴式石室を持つ6～7世紀の小円墳などが点在する。そしてこの扇状地の扇端から扇頂までのほぼ全域が、縄文から中世までの遺物を出す複合遺跡「前宮遺跡」である。これまで大々的な発掘はなかったものの、小規模な試掘や工事立会により古墳時代後期から平安時代にかけての集落遺跡であることが明らかにされつつある。

改元迫る平成31年4月22日、この前宮遺跡の発掘調査が、茅野市教育委員会文化財課により開始された。大学院で古代寺院や瓦の勉強をしていた私はこの年の3月、郷里である信州に戻り茅野市役所に就職、文化財課に配属され、早速この発掘に加わることとなった。茅野といえば2体の国宝土偶、国特別史跡尖石遺跡など、隠れなき縄文の「聖地」である。古代に別れを告げ、縄文漬けの日々が始まるものと覚悟を決めていた矢先に訪れた、古代集落の調査であった。調査地は扇状地のほぼ中央に位置する前宮本殿へのぼっていく参道の途中、右手側の民家の跡地であり、市が新たに公園として整備する予定の場所であった。敷地に隣接して、上社諏訪氏の男子が大祝になるための「即位」式を挙げた場所である「鶏冠社」や、古代の竪穴住居を思わせる「御室」と呼ばれる仮設の室の中で、厳冬の神秘的な神事が行われた場所とされる「御室社」の祠が鎮座する、まさに中世諏訪信仰の中枢をなす一角である。

秋までに予定箇所の調査が終了した。その結果7世紀後半から11世紀までの住居跡6軒、中世の墓坑とみられる土坑多数の発見があった。古代の住居跡群は黒土に掘りこまれ、黒土が覆う検出面の一面に、土師器や灰釉陶器の破片が散乱している。何本もサブトレをあげながら、まさに手探りで掘ってゆく。どうやら住居跡は複雑に切りあっているらしく、長きにわたりこの場所に居住が繰り返されてきたことを物語っていた。

今回の調査成果としてまず注目されるのは、少なくとも中世以降諏訪上社の聖域として畏怖されてきたはずのこの場所に、死穢の最たるものである墓域が形成されていた可能性が現れたことであろう。また古代の住居跡や出土した遺物の様子は、守屋山麓のほかの扇状地に営まれた古代集落のそれと比べて、とりたてて特徴的な点は認められない。むしろ清浄を尊ぶべき神域には相応しからぬ、塵芥にまみれた古代人たちの生活臭を感じさせる。

果たして古代の前宮遺跡は本当に「諏訪信仰発祥の地」だったのか？

もともと大学で古代寺院や瓦の勉強をしていた身としては、古代における祭祀や信仰の問題は興味をひかれるテーマであった。特に茅野市を含む諏訪郡は、信濃国10郡のうち唯一、一点の古代瓦の出土もなく、確実に中世以前に創建の遡る寺院もない、宗教史上の空白地帯である。私にとっての関心はいっつか、考古学的成果からいかにして諏訪社の起源の問題にせまれるのか、という点に向かっていた。

諏訪信仰のかつての姿を語るものといえば、県宝「守矢文書」など中世の文献に語られる記録や伝承が今も主要なものである。そして現在一般化している諏訪社の起源のイメージは、例えば「諏訪明神と洩矢神の抗争」の神話が先史時代における何らかの集団間の抗争の史実を反映しているのはいいか、と屢々言及されるように、この中世の記録をもとに間接的に構想されたものが多い。が、それを直接的に、より普遍的な土器や集落遺跡などの考古学的証拠を以て再考する必要があるのではないか、私はそう考えるようになった。

諏訪地方における古代の祭祀の証拠を示す遺跡や遺物の発見例は極めて少ない。文献上の記録によれば、『延喜式神名帳』には諏訪郡に「南方刀美神社二座」が鎮座するとし、諏訪郡を含む律令期の信濃の郡司には、金刺氏や他田氏を称する氏族が多く、諏訪社の祭祀を司る祝もそれら郡領層から輩出されたであろう可能性が高い。下社の大祝は中世に到っても古代さながらの「金刺」氏を名乗っている。在地の有力氏族である郡領層が地方行政を司ると同時に、造寺や神社の祝への就任など宗教的な指導力を発揮する例は、他国の事例に照らしても一般的傾向として認められる。ならば古代の諏訪社を考えるには、まず古代の諏訪地方の社会を考える方向からのアプローチもあり得るのではないかと？

私は前宮遺跡の報告書を執筆しながら、一から諏訪地方や信濃の古代遺跡の勉強をはじめた。まだもともと基本的な遺跡の分布や、土器の様相を把握するにとどまっておろ、どうぶん「考古学から諏訪社の起源にせまる」の次元には到達できそうにない。しかしたとえば諏訪郡の古代史を復元するにあたって、信濃国内のみならず隣接する甲斐方面との交流の実態も視野に入れる必要がありそうだ、ということはいえるようになってきた。今回の前宮遺跡の調査でも、甲斐方面との交流を示唆する土器が確認されている。信濃と甲斐はともに馬匹生産の盛んであった国である。郡内の大部分を湖水と台地が占め、耕作地に乏しかったであろう古代諏訪郡の住民たちは、あるいは馬の生産に集中することで繁栄したのかも知れない。

「考古学からどのように諏訪社の起源に迫るか」という課題は、現実にはいまだ雲を掴むに等しい話である。しかしこの前宮遺跡の調査成果は、諏訪地方の考古学が挑むべき新たな領域を提示したといえよう。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは松森多恵さんです。

考古者の書棚

「縄文里山づくり－御所野遺跡の縄文体験－」

御所野縄文博物館編／新泉社（2021）

松浦 誠

(1). はじめに

遺跡を知る機会はいくつかある。発掘調査の現地説明会、博物館の展示、調査成果をまとめた報告書もまた、遺跡を知る重要なツールである。しかし、遺跡に触れようと考えたときに、博物館や報告書は遺跡そのものではないし、都合よく発掘調査の説明会が行われているとも限らない。実際に遺跡を訪れたいと考えるとき、その役割を果たすのは史跡である。

遺跡のうち、国にその価値が認められ、指定されたものは国史跡となり、公園などに整備されることが多く、一般的な遺跡のイメージを代弁する存在であるといえる。しかし、整備と一口に言っても簡単ではない。当たり前だが、夏になれば草は伸びるし、時間が経てば施設は老朽化する。史跡を維持や管理することは、担当者にとっては悩ましい問題である。だが、そうした維持管理は、当時そこに暮らした縄文人も行っており、縄文時代と同じ環境や方法で維持管理を行えば、発掘調査では知りえない気づきが得られる。本書を読むとそんなことを考えさせられる。

国指定史跡の一つである御所野遺跡は、岩手県二戸郡一戸町に位置する縄文時代中期の集落跡であり、土屋根の竪穴建物跡が検出されたことで著名である。2021年には「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産として、世界遺産に登録されている。本書は御所野遺跡における縄文里山の復元を目指す取り組みについて、四季ごとの作業内容を念頭に、取り組みの中で得られた知見を、分かりやすくまとめたものである。

(2). 本書の内容

本書は20の項目から構成される。1～4は御所野遺跡の四季についてである。春にはコブシの花が咲き、秋にはオニグルミやトチノキの実が落ちる里山の様子が書かれているが、オニグルミやトチノキは発掘調査の出土遺物や花粉分析によって明らかとなった、縄文時代当時の御所野遺跡に自生した植物である。御所野遺跡では史跡整備の中で、縄文の里山の復元を目指しており、5では里山の復元計画図が示されている。

四季の項では動植物の移り変わりだけでなく、代名詞である土屋根の竪穴建物について、維持管理の様子も記される。土屋根は冬の積雪にも耐えるほど頑丈ではあるが、屋根の維持において好ましくないため、雪下ろしを行う。土屋根は春の雪解けにより大きく変化し、くぼみを生じさせ、これが屋根材の腐食を生む原因となる。これを防ぐため、春先に土屋根のくぼみを解消する屋根土のたたき締め作業を行う。竪穴建物の復元は珍しいことではないが、これらの作業は忠実に復元された土屋根の竪穴建物ならであり、四季折々の中で生じる出来事は、発掘調査の成果からは想像のつかない、縄文時代の生活における現実を垣間見せている。

6～18では実験的な取り組みや自然科学分析などで明らかとなったことを内容ごとにまとめている。7では植生の管

理の中で、木の伐採後に、必ず大量の萌芽があることに触れ、縄文人が木を増やすうえでこうした現象を利用したことも想定している。8では、縄文時代の遺構から出土した炭化材のうち約84%がクリであることに對し、同遺跡や周辺遺跡の別時代の遺構ではトネリコ属やヤチダモが多く、クリの木を好むのは縄文人の特徴であることを述べている。これについて9では、石斧による伐採実験を実施し、クリがその他の樹木に比べ、石斧での伐採に向いており、これがクリの木が多く選ばれた理由である可能性を指摘している。

19・20では、里山づくりで見えてきたことと、これを持続するための取り組みが書かれている。里山づくりの中で、縄文人は食料の獲得において、かねてから言われてきたような自然のサイクルに合わせた行動を取っているが、食料だけでなく、木材の伐採や加工についても伐採に適した時期や屋根材などに適した種類・樹齢などを選定し、計画的に行っていると想定している。そして里山づくりを維持していくため、学校や町内において団体を作り、清掃や広報活動、小学生による研究発表会などの取り組みを行い、中でも地域の子供たちの力が里山づくりに欠かせないことが説明されている。

(3). おわりに

御所野遺跡の里山づくりは、維持管理の難しさと重要性を分かりやすく伝えている。縄文時代になるべく近い方法や環境で維持・管理を行えば、土屋根が雪解けにより劣化するような問題が生じるが、想像しなかった現実を知ることができる機会でもある。新たな知見は研究に結び付き、それによる裏付けを史跡の整備や活用で用いることができる。

すでに調査され、失われた遺跡では、こうした当時の環境の再現を目指すことはかなわない。さまざまな価値づけがなされた史跡に対して失礼に当たるかもしれないが、史跡はまさに残されていることが重要で、それが活かされることが大切だろう。そのために整備や活用について計画が必要で、御所野遺跡においては里山づくりの計画がなされ、学校や町会も含めた複数の団体をサポーターとして取り込み、史跡の維持管理を持続可能な体制を構築しようと試みている。

計画を作ることやサポーターを取り込むことは容易なことではない。だが、史跡があまたある遺跡の代表であるのなら、史跡にわずかでも携わる時には私も含め、少しでも親しみを持ってもらい、行きたいと思ってもらえる、そうした創意工夫を忘れてはならないだろうと考えさせられた。

少なくともその仕掛けと思いが御所野遺跡の中には含まれていると感じる。

アルカ通信 No.236

発行日 2023年5月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行 考古学研究所 (株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp